

学 位 論 文 題 名

日中戦争期における胡適の主張の変化および
在米講演活動の研究

学位論文内容の要旨

序論は、特に胡適の在米講演活動について、先行研究の現状と課題を的確にまとめたもので、この方面の研究がまだ少ない日本においては、日中戦争および太平洋戦争を、胡適という一人の重要人物を通して見直すための視座と方向性を示している。

第一章『『日記』から見た日中戦争期における胡適の主張の変化—主和から主戦へ—』では、胡適の日記や日記に附いている書簡を中心資料として、1931年9月18日に日本軍による「柳条湖事変（満州事変）」が起きた時から1937年8月6日まで、胡適が一貫して講和を主張していたことを確認した。しかし、1935年6月～7月には抗戦への決心が芽生えており、そして1937年8月13日、上海の「八・一三」（第二次上海事変）の抗戦の中で中国軍が日本軍に勇敢に抵抗したのを見て、ついに講和策を捨て、全面的に戦争を支持するようになった、ということを描いている。

第二章「胡適の『墨子』非攻篇研究と戦争観」では、日中戦争期における胡適の主張の変化と『墨子』非攻篇との関わりを検討している。墨子が原理的には平和主義者であるのに実際は「誅」という名の下に戦争を肯定したように、胡適も平和主義者であるにもかかわらず、最終的には抗日戦争を肯定した。胡適の抗日戦争時期における主張・考え方・行動は、実は『墨子』非攻上・中・下篇に段階的に対応するかのような主張・考え方・行動をとっていた。それは胡適が意図したわけではなかろうが、結果的にはそうってしまったのである。暴力的戦争に対してどう対処するかという問題について、墨子が非攻上・中・下篇と順を追って論を展開するプロセスと、胡適が講和努力から徹底抗戦へとその態度を転換させるプロセスとは図らずも一致し、平和主義者である両者がともに、結局は戦争を避けることができずに容認したこと、それどころか、両者とも戦争する覚悟をした途端に、戦いの専門家となり、墨子は防衛術を練り集団として戦争行動を実践し、一方、胡適は綿密な作戦方針を構想し、政府首脳部を導き動かし、自身も外交面においてアメリカという最も重要な国際舞台で抗日の実績を上げ、戦略的手腕を発揮したことを活写している。

第三章「日中戦争期における駐米大使胡適の講演活動の研究」は、胡適のアメリカでの講演活動を、時間、場所、タイトル、対象者、出典・根拠について、一つ一つ裏付けをとって統計的に分析したものである。胡適は1937年9月23日から1942年9月18日まで国民使節および駐米大使としてアメリカに駐在した。その間、胡適が行った講演は、確認できる限りでは236件あった。講演内容を基にまとめられた雑誌掲載論文は32篇あり、それ以外に講演によらない論文のみのものが35篇確認できる。胡適の講演の対象者は、様々な層に及ぶが、大学教員や大学生などに向けて行なったものが比較的多い。アメリカ国民向けのラジオ放送は少なくとも16件はあった。胡適が講演を行った場所は、主にアメリカの東海岸と西海岸に分布しているが、特に、ニューヨーク、ワシントン、ミシガン、カリフォルニア、ペンシルバニア、マサチューセッツが多い。また、カナダも西から東まで広範囲に及ぶ。講演の内容は主に、①九国条約（国際新秩序）、②日本の自殺的愚行、

③福奇谷作戦 (Valley Forge)、④「苦撐待變」(苦しみに耐えて変化を待つ)、⑤「為世界作戦」「為民主国家作戦」(世界のために戦う、民主国家のために戦う)、⑥民族生存・抵抗侵略、⑦米国の国際的リーダーシップ、⑧日本の侵略行為、という8つのキーワードまたは話題に重点を置いている、と分析している。

第四章「国民使節および駐米大使としての胡適の講演活動の意義」では、国民使節および駐米大使としての胡適の講演活動が、日本の新聞や雑誌でどのように取り上げられ、日本および太平洋戦争へどのような影響を及ぼしたのか、その意義を考察している。敵国だった日本は、いち早く新聞で胡適の講演活動に関する記事を書き、雑誌でも講演内容を取り上げた。それらの記事を見ると、胡適の講演活動を含む外交活動に関して、日本側の反応はとても敏感で、胡適の講演に対して神経質になっていたことが分かる。そして結論的には、国民使節および駐米大使として胡適が行った5年間で約400回を数える講演がアメリカの対日戦争を肯定する世論を形成することに成功した、としている。胡適は、世界情勢を鋭く的確に判断し、中国を救うことを第一に考え、そのために自分にできることを最も効果的に最も精力的に行い、その活動を米国の参戦という結果にしっかりと結実させた、と評価できる。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 近 藤 浩 之
副 査 教 授 佐 藤 鍊太郎
教 授 白木沢 旭 児

学 位 論 文 題 名

日中戦争期における胡適の主張の変化 および在米講演活動の研究

本論文は、日中戦争期における胡適の主張の変化および在米講演活動を主たる研究対象とし、その主張変化の時期とその背景、およびアメリカでの講演活動の詳細とその影響や意義を明らかにしたものである。胡適の在米講演活動の意義と影響は、これまでどちらかといえば（特に中国では）低く否定的に評価されていたが、最近ではそれを見直し、高く肯定的に評価する論調が増えて来ている。本論文も、日中戦争期における、国際関係や平和に関する胡適の考え方や、それに基づく講演活動という実践的な行動を、より積極的に評価しようという観点に立っている。しかし、日本ではこれまで、胡適の在米講演活動に関する研究自体がわずかしがなく、今後は、日中戦争のもう一方の当事者である日本の立場から胡適の活動とその意義を見直すことが必要であろう。

第一章から第四章までは、それぞれ『中国哲学』第35号（2007年）、『中国哲学』第38号（2010年）、『北海道大学大学院文学研究科 研究論集』第11号（2011年）、『中国哲学』第39号（2011年）に発表した論文をまとめたものであり、その前後に新たに書き足した序論と結論を配する形で、本論文全体が構成されている。

第一章「『日記』から見た日中戦争期における胡適の主張の変化—主和から主戦へ—」では、特に1935年6月～7月の日記およびそこに附された手紙を丹念に読み込んだ結果、当時、胡適が「何をおいても、十年間の猶予の期間を獲得することを謀らなければならない」と考え、依然として講和を第一に優先していたことを明らかにした。その一方で「日本切腹、中国介錯」策と名付けた徹底抗戦策を主張しているかのように見えるのは、講和を成功させるために、裏面では「絶大な犠牲」を払っても諦めず抗戦し続けるという決意が必要なのだと（政府首脳部に）覚悟を促すためであった、と指摘したのは、先行研究の盲点を突き、胡適の本意と戦略構想を理解する上で非常に重要で、高く評価できる。

また第二章「胡適の『墨子』非攻篇研究と戦争観」において、胡適が晩年、「『墨子』の「非攻」の理論は実に名著であり、とりわけ三篇の中の非攻上篇は実に最も理にかなった反戦の名著である。人類の理性上、最も矛盾し、最も無理性で、最も論理に背く、好戦的な、人間の本性に反対している」と述べた、その言葉の深奥の意味と意義を明らかにしたことは、現在と未来の国際関係と平和を考える上でも重要である。

第三章「日中戦争期における駐米大使胡適の講演活動の研究」は一定の資料的価値を有し、これにより、5年間で約400回を数え、最後の1942年前半の半年足らずの期間に「1万6千マイルの行程と100回を超える講演」という過密スケジュールをこなしたとされる胡適の、日米開戦に懸ける覚悟の程が実態として理解できる。

第四章「国民使節および駐米大使としての胡適の講演活動の意義」では、いくつかの胡適の在米講演の内容を、ほぼ全文、日本の雑誌が紹介し批評しているものを材料として分析し、当時の新聞記事や人物評をも捜し集めて日本側から見た胡適像と、その活動の影響と意義とを、明らかにした点が高く評価できる。

論文全体として、日中戦争及び太平洋戦争の展開に対して、胡適の果たした役割が決して小さなものではなく、胡適本人が非常な覚悟と戦略構想を持って事に当たり、自分にできる最も効果的な方法（すなわち講演活動）を駆使して、日米開戦の実現に全力を尽くしたということを、明らかにすることに十分に成功している。この胡適の思想と行動の研究は、日中戦争及び太平洋戦争の研究、ひいては現在そして未来の日本と中国の関係、世界の国際関係や国際平和の研究においても、貴重な資料と視点を提供することになり、高く評価できる。以上のように、この分野の研究の発展に寄与する新たな材料と視点を提供した本論文は、博士（文学）の学位を授与されるにふさわしいものである。